

團伊玖磨氏作曲「筑後川」演奏会

「桧原桜」と確かなハーモニー

進藤先生の遺徳 地域振興に貢献



館 報

玄洋116号

平成25年9月1日

発 行

社団法人 玄洋社記念館

郵便番号 810-0062

福岡市中央区荒戸三丁目

6-36 西公園ハイツ201号

電話 (092) 762-2511

FAX (092) 762-2502

玄洋社憲則

- 第一条 皇室ヲ敬戴ス可シ
- 第二条 本國ヲ愛重ス可シ
- 第三条 人民ノ権利ヲ固守ス可シ

今号の主な内容

- ▽ 発足から30年。廣田先生顕彰祭を斎行 2面
- ▽ 平野神社で國臣生誕祭 3面
- ▽ 賛助会員芳名録 4面
- ▽ 寄稿「中野正剛研究」執筆にあたって 6面

心地よさそうに歌う参加者たち 昼の部で



ゆかりの地で開催

福岡市南区

日本を代表する作曲家、團伊玖磨氏の合唱組曲「筑後川」の合唱演奏会が三月三十一日、福岡市南区塩原二丁目の南市民センター文化ホールで開催された。

この演奏会のために組織された実行委員会（会長、進藤邦彦・玄洋社記念館理事）が主催し「團伊玖磨記念『筑後川』IN桧原2013」と銘打った演奏会には、全国からの三十合唱団と個人、合わせて約六百五十人が参加。團氏の信頼厚かった現田茂夫氏の指揮で、熊本県・阿蘇外輪山の麓に源を発する筑後川が、福岡県の筑紫平野を横断し有明海に注ぐ雄大な姿を表した五章から成る名曲を歌い上げた。

演奏会は午後の部と夕方の部の二回行われ、いずれも定員八百人の会場は聴衆

で埋まった。

「筑後川」の演奏会は、團氏が日中交流事業で訪れた蘇州市で客死した翌年の平成十四年から毎年、筑後川に沿った各地で開催されてきた。十三回忌の今年、福岡市の南区で開催されたのは、同区桧原一丁目「桧原桜公園」にある「桧原桜」と呼ばれる十本の桜と團氏の縁にちなんでだった。

桧原桜は、昭和五十九年三月、道路拡幅で伐採が予定されていたところを、付近住民の助命嘆願を受けて当時の進藤一馬市長（玄洋社記念館創設者）平成四年歿）が計画を変更して残した。進藤市長は「筑前の花守り市長」と市民から慕われた。

この逸話をテレビのニュースで知った團氏が、自分の担当するグラフ誌の随筆



桧原桜の下に歌声は流れた

欄で紹介した。團氏は亡くなる五十日前の平成十三年三月二十九日に桧原桜を訪ねている。今回の演奏会は、桧原桜との確かなハーモニーも奏でたのだ。

多くの人々が感動した桧原桜の逸話が生まれて今年

演奏会の前日、三十日の午前十一時からは「桧原桜公園」で「筑後川で歌う『筑後川』」が催された。

演奏会の参加者のうちの約百二十人が参加した。咲き誇る桧原桜の下に現田氏の指揮で、「筑後川」の歌声が流れた。会場に掲げられた写真パネルの團氏の表情もうれしそうに見えた。

廣田弘毅先生顕彰祭

発足から今年は満30年

●●薫風の中厳肅に斎行●●



遺徳継承の思いを込めて斎行された廣田先生の顕彰祭

崇敬の念脈々と

戦前の福岡県が生んだただ一人の総理大臣、廣田弘毅先生の遺徳を顕彰する「廣田弘毅先生顕彰祭」は、社団法人玄洋社記念館主催が、五月十八日、福岡市中央区城内五（福岡市美術館入り口）の「廣田弘毅先生銅像」で厳肅に斎行された。「廣田弘毅先生顕彰祭」は今年、発足から満三十年を迎え、この日は三十一回目の斎行だった。約四十人の参加があった。（5面に関連記事）

銅像の前に祭壇が設けられ、福岡県護国神社の中島啓之神官によって祝詞奏上、玉串奉奠などの神事が進められた。

筑前琵琶保存会会主、青山旭子師が、北川晃二作詞「廣田弘毅」を献奏して廣田先生の遺業をたたえ、鎮魂した。作詞者の北川氏（故人）は、廣田先生の伝記「黙してゆかむ―広田弘毅の生涯―」の作者。

神事が終わって挨拶に立った（社）玄洋社記念館の吉村剛太郎理事長は「銅像の碑銘にもあるように、廣田先生は第二次世界大戦後の極東国際軍事裁判でA級戦犯の罪に問われ、一切の弁明をせず死刑判決を受けて、昭和二十三年十二月二十三日、文民でただ一人刑死された。きょう、その廣

像の完成除幕式が行われた。廣田先生のご長男弘雄氏ご夫妻とご家族も出席。銅像建設期成会関係者はじめ参列者は七百人を超えた。

廣田先生の慰霊行事としては、それまで菩提寺の聖福寺（福岡市博多区御供所町）で、祥月命日の十二月二十三日を中心に盛大な法要が進藤先生の主宰で営まれていたが、銅像の建立により翌年の同五十八年から、銅像の完成日に銅像前で法要に代わる「顕彰祭」を斎行することになった。現在は五月十五日に近い土曜日を目安に斎行されている。

「廣田弘毅記念青少年育成会」と「玄洋社記念館」の合併により平成二十四年から「玄洋社記念館」が主催している。

銅像は高さ三メートルで台座が二層。台座の上部、廣田先生の足元あたりに廣田先生ご愛用の硯と、銅像建設に協賛いただいた二千六百を超える法人、団体、個人のご芳名を入れたカプセルが納められている。

銅像の制作者は、当時の佐賀大学名誉教授で日展会友、緒方敏雄氏。

銅像の建立機に
「顕彰祭」始まる

一回目の「廣田弘毅先生顕彰祭」は昭和五十八年の五月十五日に社団法人「廣田弘毅記念青少年育成会」（進藤一馬理事長）によって斎行された。参加者は約百八十人を数えた。

その前年、昭和五十七年五月十五日に廣田先生の銅

志士・平野二郎國臣

生誕祭を斎行

「こより文字」を披露

勤王の志士、平野國臣の生誕祭が三月三十日、福岡市中央区今川一丁目の「平野神社」(山内勝二郎宮司)で催された。

今年、國臣生誕百八十五年。東京、名古屋、大阪、長崎から駆けつけた國臣の縁者をはじめ氏子や崇敬者ら約八十人が出席した。

山内宮司により神事が進められ、吟道光世流・吉田城西師が詩吟を奉納した。

平野神社責任役員の吉村剛太郎氏(社団法人玄洋社記念館理事長)は「國臣は坂本竜馬に匹敵する快男児



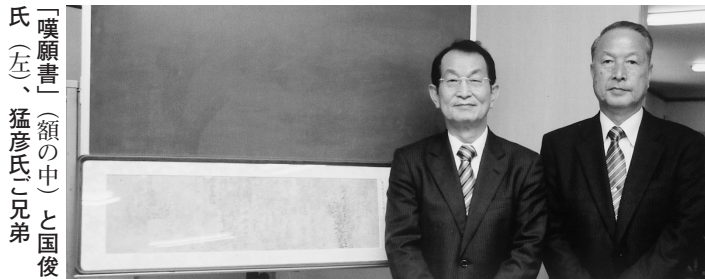
約80人が出席して斎行された平野國臣の生誕祭

れた。古書店にあったものを、古書店が閉鎖するというので散逸を防ぐために購入した。

國臣は、文久二年(1862年)四月、參勤交代で江戸へ向かう藩主黒田長博を播磨国・明石大蔵谷で迎え、薩摩藩と提携して尊王攘夷の兵を挙げるべしと説いて引き返させたが、捕らえられ福岡の榎木屋の牢獄に投獄された。

嘆願書は、獄中、紙をちぎって文字を作り、飯粒で紙に貼って綴ったもので、漢文で「本を読ませてくれ、筆や墨をくれ」と訴えている。

昨年五月に逝去された父、原國郎さんに代わって生誕祭に出席された國臣の玄孫の原國俊氏(65)は「大阪府豊中市在住」、猛彦氏(61)は福岡県柳川市在住。兄弟は高祖父、國臣の体温が伝わってくるような「嘆願書」と対面して感慨深げだった。



「嘆願書」(額の中)と國俊氏(左)、猛彦氏(右)兄弟

「日本はどこへ向かうのか、難しい時代。この状況を國臣に、どう考えるか、と尋ねても自分で考えろというだろう」とユーモアを交えて語った。

進藤喜平太の思い出・第2部

「追悼録」から

進藤翁の逸話 藤本 尚則(談)

(前号より続く)

獨り進藤翁は黙って白洲から歸って来て平気な顔で座って居られるので同志の者が不思議に思つて身体を改めて見ますと、進藤翁の身体が誰れよりも非道く傷ついで居たので皆聲をのんで進藤翁の豪勇に舌を巻いたのであります。

此の辛抱強い翁が、獄中の生活で酒が飲めないのは閉口されたようでありました。

丁度その頃コレラが大流行して居りましたので各獄屋に雪隠消毒用として米酢が渡つたのを、同じ獄屋に居た奈良原至氏と一緒に飲んで僅かに酒の渴を医されたと云う事でありました。此の時の事を後に翁は「永い間飲まずに居たので可成り酔つた」と語つて居られたのであります。

何事も自分で先に立つて模範を示す翁でありまして、向浜から竹下の桑園に移つた際、鼻を打ち、駆け選べをして誰れ一人進藤翁に敵し得る者はなかつたのであります。

思想を練り、筋骨を鍛える事を一日も忘れなかつた翁は若い連中が寝坊をすれば赤い土びんを持って来て、頭から水をぶっかけられたと言ふ事で修養と鍛錬には極めて厳でありましたが、又實に子弟の情にあつてい方でありまして

「荒い連中には對抗したが、進藤さんにはどうしても頭が上がらなかつた」と向浜以来四十年間親しくその感化を受けられた、玄洋社の月成勲さんの話でありました。

翁は七十六年の生涯常に陰に在つて縁の下の力持に甘んじられ地味な働きに終始され、己れを空しくして一意たゞ議を以て貫かれた大人物格でありまして、逸話らしい逸話のない事、その事が進藤翁の貴い逸話であるのであります。

◆(この項おわり)

◆次号から柳猛直氏の「筑前風濤録・頭山満と玄洋社」を掲載

長期間に渡つてご愛読いただいた連載「進藤喜平太の思い出」は、今号で終了しました。次号からは福岡市文化賞受賞の地方史家、柳猛直(たけなお)氏(大正六年〜平成九年)作の「筑前風濤録・頭山満と玄洋社」を掲載します。

柳氏は元フクニチ新聞記者で、文化部長、編集局長、論説委員長などの要職を歴任されました。「筑前風濤録・頭山満と玄洋社」は、同社在職中に執筆されフクニチ新聞に昭和五十七年三月一日から同五十八年十月十八日まで四百二回連載されました。今回の掲載は、同紙の連載を再掲するものです。

フクニチ新聞連載の際、題字は玄洋社記念館創設者で福岡市長だった進藤一馬先生が揮毫されました。本紙でもそのまま借用します。新聞連載は、写真、挿絵付きですが、これは割愛させていただきます。

柳氏は新聞連載の開始に当たつて「(明治)藩閥政府は野の声を聞くために遺賢を放任しておくほど寛仁大度ではなかつたから玄洋社は弾圧に抗し、風濤に逆らつて、野の遺賢の存在を主張し、政府も渋々、認めざるを得なかつたのである。(略)『筑前風濤録』連載の意図は玄洋社と頭山満以下のそうした事跡に改めて光をあてようというものである」と記しています。本紙の再掲に関しては、柳氏のご遺族から快くご了承を頂きました。また資料収集で福岡市総合図書館にご協力を頂きます。お二方に厚くお礼申し上げます。

賛助会員芳名録

平成25年度

7月26日受け付け分まで(敬称略)

▼法人・団体の部

【三万円】

(財)黒田奨学会 (福岡市)

警固神社 (同)

九星飲料工業(株) (糸島市)

(株)玄南荘 (福岡市)

平野神社 (同)

福岡県護国神社 (同)

東海大学 (東京都)

駿和物流(株) (福岡市)

【五万円】

上田藤兵衛 (京都市)

【三万円】

吉村剛太郎 (福岡市)

安部 泰宏 (同)

花田 勲 (東京都)

【二万円】

浅野 秀夫 (福岡市)

妹尾 俊見 (同)

【一万円】

進藤 勇 (府中市)

稲員大三郎 (福岡市)

川口 浩 (同)

光安 力 (同)

おばた久弥 (同)

南原 茂 (同)

森 英鷹 (同)

富永 計久 (同)

伊藤 嘉人 (同)

川上 晋平 (同)

打越 基安 (同)

阿部真之助 (同)

今林ひであき (同)

福田まもる (同)

飯盛 利康 (同)

北嶋雄二郎 (同)

大原弥寿男 (同)

大森 一馬 (同)

津田信太郎 (同)

川上 陽平 (同)

鬼塚 敏満 (同)

笠 康雄 (同)

国分 徳彦 (同)

水城 四郎 (同)

平畑 雅博 (同)

三角公仁隆 (同)

浜崎 太郎 (同)

西本 潤也 (同)

梅本 真央 (同)

柴田 和彦 (同)

高瀬 篤 (宗像市)

永島 英也 (福岡市)

平湯 芳裕 (名古屋屋市)

緒方 基一 (八代市)

村井 正隆 (久留米市)

林 登 (福岡市)

興膳 克彦 (中間市)

三木 年史 (徳島市)

的野 泰庸 (福岡市)

縄田 智行 (同)

山内勝二郎 (同)

箱田 満輔 (小平市)

松井 俊規 (福岡市)

久保田 仁 (同)

広瀬木綿子 (同)

藤田 道子 (同)

片山 悠 (東久留米市)

濱地勝太郎 (栃木県)

内藤 武宣 (下野市)

堺 弥蔵 (東京都)

堺 彪 (福岡市)

谷 十三 (同)

柴田 文雄 (同)

飯盛 利弘 (志免町)

高場 康幸 (古賀市)

加藤 幸子 (同)

秋田 清 (福岡市)

木部 岳圭 (さいたま市)

小畑 文子 (福岡市)

戸高 有基 (津久見市)

浜地 金剛 (東京都)

山部 茂樹 (横浜市)

草野 和子 (松戸市)

西嶋 俊光 (福岡市)

西村 司 (同)

長岡 聖司 (同)

樋口 吉朗 (入間市)

木戸 龍一 (糸島市)

渡邊 一馬 (別府市)

戸川 愛子 (福岡市)

大原 毅 (同)

上杉 清文 (富士市)

魚谷 哲央 (京都市)

堺 憲一 (福岡市)

後藤 元生 (同)

白石 安子 (同)

永島 英也 (同)

飯島 健児 (東京都)

坂牧 大陸 (福岡市)

中山 幸一 (同)

頭山 太郎 (立川市)

頭山 尚子 (同)

小野 勇夫 (福岡市)

仲原 志平 (糸島市)

加藤 芳子 (福岡市)

土肥 國夫 (同)

吉村 弘美 (同)

金子 奉義 (東京都)

坂上 英雄 (大阪市)

内田 勝美 (福岡市)

酒井 智堂 (鹿児島市)

梶原 昂 (福岡市)

末永 正彦 (東京都)

青山 旭子 (福岡市)

荒津 茂徳 (愛知県)

池内 光男 (同県大府市)

池内 公子 (北海道)

進藤 政子 (宗像市)

藤本 顕憲 (福岡市)

秋吉 謙一 (久留米市)

牧 昭三 (福津市)

三原 朝彦 (北九州市)

室 潔 (東京都)

徳重 茂 (八丈町)

山内 敬一 (茅ヶ崎市)

早瀬 内海 (岡山市)

田中 久也 (福岡市)

藤川知佳子 (吹田市)

矢田 祐三 (糸島市)

山崎 拓 (福岡市)

井上ヒロミ (同)

馬場 美佳 (北九州市)

高井 善三 (糸島市)

篠原 武 (久留米市)

宮木 紀昭 (福岡市)

柴田 文彦 (同)

古田 修吾 (東京都)

田坂 大蔵 (福岡市)

吉田 慧子 (同)

白土 宏 (同)

有馬 學 (東京都)

岩崎 成敏 (福岡市)

鈴木 克代 (同)

谷本 憲彦 (藤沢市)

中本 零時 (東京都)

隠岐 康 (同)

新宮松比古 (福岡市)

お礼の言葉

この度、平成二十五年度の賛助会費納入をお願い致しましたところ、永年の会員の方、また新規の会員の方と、多くの方々にご協力を賜りました。誠にありがとうございました。ご厚情に感謝申し上げます。

中野先生銅像
来年除幕30周年

玄洋社記念館は今年度「中野正剛先生顕彰祭」を次のとおり開催します。参加希望者は、中野正剛先生顕彰会事務局へ電話またはFAXで早めにお申し込みください。

- ◇日時 平成25年10月26日(土曜日) 午前11時開始
- ◇場所 鳥飼八幡宮境内「中野正剛先生銅像」前
(福岡市中央区今川2丁目1-17)
- ◇参加費 式典だけ参加の方は千円、直会(なおらい)にも参加の方は、ほかに3千円。
- ◇電話 092・762・2511
- ◇FAX 092・762・2502

「中野正剛先生顕彰祭」を開催

中野正剛先生顕彰会

同五十九年十月二十七日、約七百人が参列して「完成除幕式」が催された。この年、進藤先生にはもう一つ大きな出来事があった。進藤先生は、同年三月、三期限りでの福岡市長引退を表明され後継候補も決まった。ところが後継候補が入院の事態に。進藤先生は固辞されたが「保守市政を守るため」との説得を断れず四選出馬。同年九月の選挙で当選を果たされた。

廣田先生銅像

浩々丹心 輝萬古

台座に刻む座右の銘

「博多・聖福寺」展で遺墨展示

銅像の高さ三三三。支える石の台座は高さ二二二、幅、奥行き各二・五、重量は三三三。その廣田弘毅先生の銅像の台座の背面に「浩々丹心 輝萬古 弘毅書」と刻まれている。「浩々たる丹心(たんしん) 萬古(ばんこ)に輝く」と読む。「深い真心は永遠に輝く」という意味で、廣田先生の座右の銘の一つとされる。台座の文字は、銅像建設に際して廣田先生の菩提寺・聖福寺(福岡市博多区御供所町)所蔵のご遺墨から模刻された。先ごろ開催された「博多・聖福寺」展で、遺墨が、展示された。(2面参照)

ご尊父葬儀の折揮毫

榮西禪師八百年大遠譚記 横八〇・二寸の堂々たる一念特別展と銘打った同展 幅。この遺墨一点は、ごは、さる四月二十日から六月十六日まで福岡市博物館で開催され、門外不出の名宝を含む寺宝約二百点が展示された。主催は同博物館、同寺など。

廣田先生のご遺墨は「興禪護國」と「浩々丹心」の二点が会期の前後に分けてそれぞれ展示された。興禪「」は縦一二四・四寸、横一七九・五寸、「浩々丹心」は縦一五一・三寸、



台座に刻まれた廣田先生の座右の銘

尊父、徳平氏の葬儀で帰福した折、廣田先生が聖福寺で揮毫された。その際のいきさつが、昭和五十九年四月二十日発行の本紙「玄洋」二十号に、当時の聖福寺住職(第百三十二世)對雲室善来老師が寄稿された「広田弘毅氏遺墨について」で述べられている。一部を引用する。文中に出てくる「汲古室」とは、廣田先生が尊崇していた同寺第百二十八世住職、汲古室東瀛(とうえい)老師のことである。

より勝願民衆救済堂で葬行する
 大々頭職に就した大廣村 伍長、野田大助、野田良、小田君、出舟、故郷収帳、故郷編年、次長長に對する書は五日(改) 廣田先生遺墨の合同刊行は、時年(改)から遺墨で遺墨を以て式に九日(改)時三十分より
 父を失はれた
 郷土の大先輩、元首相廣田弘毅氏の遺墨を模刻した台座の文字は、弘毅先生の遺墨を以て式に九日(改)時三十分より

★朝高松の故郷者編年次
 けを弘毅氏の遺墨を以て式に九日(改)時三十分より
 ろうけて快方に向
 老の勢は健れず
 て多くは床にうつ
 せりて
 の心は至つて
 せりて
 の心は至つて
 せりて

徳平氏の逝去を伝える新聞の見出し

建設コンサルタント
 建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
 代表取締役社長 花田 勲
 専務取締役 児玉 和久
 本社 福岡市博多区東比恵三丁目二四一九
 〒八二・〇〇〇七 電話(092) 48-13100
 東京支社 東京都杉並区高円寺南一丁目三十一
 〒一六・〇〇三 電話(03) 5378-15800
 営業所 千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のユア企業!! 21世紀の水産業界を領導する「アキラ」
 ◇鮮魚卸業◇
株式会社 アキラ水産
 代表取締役社長 安部 泰宏
 本社 福岡市中央区長浜3丁目11-3
 電話092-71116601(代表)
 関連会社/株式会社コウトク水産

《実は、昭和十七年十一月五日、御尊父徳平氏が他の西日本新聞は「恵まる九界され戦雲愈々急変下、敢てその御葬式に十一月六日より十六日迄帰郷されまし

た折、当山住職愈好室戒應老師(汲古室の法孫)の要請にて、其頃、焦眉の「国威宣揚」にと、当時正面玄関の大衝立てに「興禪護國」の四文字を大書していただきました》(注)この四文字は、聖福寺の開祖榮西の著書の標題『興禪護國論』からとったもの)

《更に、御自身(愈好室要請以外)に、先述の「浩々丹心輝萬古 弘毅書」と、画仙紙全紙一枚大に二行書され(略)菩提寺当山へ寄進して、上京されました》

「浩々丹心」は中国明代の官僚楊繼盛の漢詩をヒントに廣田先生が作られたといわれる。

株式会社 玄南荘
 代表取締役社長 測上 高当
 学生会館(学生会)、単身者向け事業
 受託給食・F&B(レストラン)サービス事業
 本 社 福岡市中央区荒戸二丁目二四一
 TEL 〇九二七-一五六七二
 FAX 〇九二七-一五六七二
 MAIL fukukora@gemanso.com

造園・緑化 自然とコミュニケーション
 株式会社 別府梢風園
 代表取締役社長 別府 壽信
 本社 〒812 福岡市東区青葉一丁目六一五三
 TEL 〇九二六-九一〇六七八
 FAX 〇九二六-九一〇四五四
 Email: info@sbaofuten.co.jp

「市民に惜しまれ 徳平氏のご逝去は、多くの市民に惜しまれた。」

「去る五日逝去した故廣田徳平翁の葬儀は弘毅氏の意向により時局柄極く近親者だけで内輪に営むことになつてゐたが玄洋社、弘毅會、浩々居その他町内會、地元有志の熱心な申出を汲んで八日午後三時から御供所聖福寺で執行する葬儀について四時から五時まで一般告別式を執り行ふことになった」と八日付新聞は予告記事で伝えている。

株式会社 原土井病院
 特定医療法人
 代表取締役社長 原 寛
 開放型病院・臨床研修指定病院
 (財)日本医療機能評価機構認定
 〒813-8588
 福岡市東区青葉6丁目40番8号
 ☎092-691-3881(代)
 http://www.haradoi-hospital.com/

BEPPU
 代表取締役社長 別府 壽信
 本社 〒812 福岡市東区青葉一丁目六一五三
 TEL 〇九二六-九一〇六七八
 FAX 〇九二六-九一〇四五四
 Email: info@sbaofuten.co.jp

寄稿

「中野正剛の研究」執筆にあたって

立教大学社会学部兼任講師

吉田 則昭



リストについて多少書いてきたことから、ある出版社から「中野正剛の評伝を書かないか」との申し出を受けました。先生はジャーナリストから出発した著名な政治家であられたことは周知のところですが、先生に

成されたイメージがとも強いことを意識するようになりました。戦後の「中野正剛」の取り上げ方は、先生が昭和18年に自刃してから、戦後もしばらくの間、その謎解き、「真相」究明ということで新聞・雑誌・

「真相箱」は、「日本の政界が生んだもつとも優れた個人主義政治家の一人であり、明治初年以來、日本の政界がはぐくみ育ててきた一連の政治家の流れを汲む人でありました」と伝えました。こうした放送は「真

相」を明かすということだけなく、戦後の民主化の中、GHQ側が反軍・反東条の姿勢を評価するものでした。

戦後に書かれた先生のイメージは、このようにまずは戦後秘史や「真相」ものとしてあらわれ、それを先生の共鳴者や親友、ご遺族によって書かれ、またそれがさらに修正するということで数多く残されてきました。今日では、戦後1945年から49年の約5年間の期間の新聞・雑誌記事について、筆者もその構築に携わってきた「20世紀メディア情報データベース」(NPO法人インテリジェンス研究所: <http://20thdb.jp/>)で、正確な記事数等をたどることが出来ます。

昨年10月、福岡・鳥飼八幡宮で行われた玄洋社の中野正剛先生の顕彰祭に初めて参加させて頂きました。故郷の先人たちの想う皆様方の気持ちに大変胸を打たれました。先日のように思いたされます。筆者も中野先生を敬愛するところですが、本稿では、研究対象として中野先生に言及する場合、「中野正剛」と記させて頂くことをご容赦願いたく存じます。

元来、私はメディア史、ジャーナリズム史を専門に研究する一介の研究者にすぎませんが、朝日新聞で活躍した緒方竹虎、笠信太郎など福岡ゆかりのジャーナ

方竹虎とCIA—アメリカ公文書が語る保守政治家の実像—(平凡社新書)という書を上梓させて頂きました。その執筆過程で緒方の親友であった中野先生については、戦後に形

ラジオなどで語られてきました。先生のイメージがそこから形成されてきた点に大きな特徴があります。一例をあげれば、終戦直後、GHQ民間情報局(CIE)の指導の下、NHKでラジオ放送された番組「真相箱」は、「日本の政界が生んだもつとも優れた個人主義政治家の一人であり、明治初年以來、日本の政界がはぐくみ育ててきた一連の政治家の流れを汲む人でありました」と伝えました。こうした放送は「真

戦後に書かれた先生のイメージは、このようにまずは戦後秘史や「真相」ものとしてあらわれ、それを先生の共鳴者や親友、ご遺族によって書かれ、またそれがさらに修正するということで数多く残されてきました。今日では、戦後1945年から49年の約5年間の期間の新聞・雑誌記事について、筆者もその構築に携わってきた「20世紀メディア情報データベース」(NPO法人インテリジェンス研究所: <http://20thdb.jp/>)で、正確な記事数等をたどることが出来ます。

一方、アカデミズムにおける中野正剛「研究」は、主に1970年代以降、「ファシズム研究」の枠内で進められてきたともいえます。特に中野先生の戦時のイタリア・ムッソリーニへの共鳴は、「戦争責任」との関連からの否定的評価でなく、むしろ今日の研究状況の中で積極面からの評価を行うことで、まだま

だ研究の余地があるともいえます。しかし、2000年代以降は、史料状況の進歩もあり、国内の史料だけにとどまらず、対戦国であったアメリカ、そして太平洋戦域におけるイギリス、オーストラリアなどの同盟国などが、「平和シンボル」として、中野正剛を利用し、ピラなど宣伝、プロパガンダに用いられたことが明らかになってきています。そうした研究状況の広がりを、私自身、今年3月早稲田大学20世紀メディア研究所の研究会で「戦後における『中野正剛』再考」にて報告させて頂きました。

執筆予定の評伝では、中野先生自身の著作だけでなく、戦後、中野先生について書かれたものも含めて、総体的にとらえていくことはもちろんですが、他の類書との差別化を図るべく、き取り、資料探索というようなことで執筆を進め、精進していきたいと思っております。この『玄洋』読者の方

で、中野先生に関する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どのようなものでもかまいませんので、一報頂ければ幸いです。

中野先生を迎え福岡市・東公園で開かれた東方大会 (推定昭和8年頃。前から2列目左から8人目が中野先生=石瀧豊美氏提供)



中野先生を迎え福岡市・東公園で開かれた東方大会 (推定昭和8年頃。前から2列目左から8人目が中野先生=石瀧豊美氏提供)

中野先生に関する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どのようなものでもかまいませんので、一報頂ければ幸いです。



中野先生

中野先生に関する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どのようなものでもかまいませんので、一報頂ければ幸いです。

中野先生に関する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どのようなものでもかまいませんので、一報頂ければ幸いです。

中野先生に関する資料をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どのようなものでもかまいませんので、一報頂ければ幸いです。

「大アジアの関係認識したい」と山崎理事長

厳粛に「招魂祭」 斎行

西郷隆盛の西南戦争に呼応し、第二の明治維新の到来を目指して官軍を相手に決起し散華した、越知彦四郎、武部小四郎はじめ旧黒田藩士を中心にした福岡の壮士を慰霊・顕彰する「明治十年福岡の変招魂祭」が、六月二日、福岡市中央区赤坂一丁目の柔道場「明道館」で厳粛に斎行された。

「福岡の変は、明治十二年の玄洋社発足の原点である。同志の志を伝えるため頭山満、箱田六輔、平岡浩太郎、進藤喜平太、宮川太郎、奈良原至ら諸先輩が

例年は、同区平和三丁目、平尾霊園内の「魂の碑」苑で斎行されるが、同日は南区東公園に、千代の松原招魂碑を造った。今、さまざま分野で歴史が忘れられている。国際関係がその象徴と言えるのではないだろうか。玄洋社の先人が目指した「大アジア」の関係を忘れず認識したい」と述べた。

波多江健一館長から靖国神社関連の資料が配布され招魂祭は終了した。「福岡の変」は、明治十年三月二十八日に勃発した。参加した者六百余人。このうち五十二人が討ち死に、あるいは自刃し、捕らえられて五人が刑死。獄中死した者を合わせて百三人が志のために殉じた。



「明道館」で行われた「明治十年福岡の変招魂祭」

東公園の「千代の松原招魂碑」では、玄洋社社員によって祭祀が続けられたが、福岡県の児童遊園地建設に伴って昭和三十九年、平尾霊園に移転した。



玄洋社の故郷・福岡の話題をお伝えます

NHK大河ドラマ放映決定で

「官兵衛」旋風吹く

経済効果求めPRに熱

この春あたりから、福岡市に「官兵衛」旋風が吹きまくっている。来年のNHK大河ドラマで、戦国武将、黒田官兵衛（如水）を主人公に据えた「軍師官兵衛」の放映が決定されたのが発端。

大河ドラマで取り上げられた土地や主人公ゆかりの地が一躍有名になって、観光誘致を引き金に地元経済振興に大きく寄与してき

たこれまでの例に、福岡もあやかろうというわけだ。福岡市役所ロビーには「みんなで盛り上げよう福岡！2014年大河ドラマ『軍師官兵衛』と記した横九郎、縦一丁の横断幕が登場。繁華街や商店街など街の至る所に「軍師官兵衛」と大書した幟（のぼり）が立ち並ぶ。

幕藩時代の福岡市は、黒田藩あるいは福岡藩と呼ばれるが正式には筑前藩。初代藩主は黒田長政で、その父が官兵衛。官兵衛は豊臣秀吉の時代、秀吉による九州平定の戦いで荒廃した福岡（博多地区）の復興事業

「軍師官兵衛」と記した横九郎、縦一丁の横断幕が登場。繁華街や商店街など街の至る所に「軍師官兵衛」と大書した幟（のぼり）が立ち並ぶ。幕藩時代の福岡市は、黒田藩あるいは福岡藩と呼ばれるが正式には筑前藩。初代藩主は黒田長政で、その父が官兵衛。官兵衛は豊臣秀吉の時代、秀吉による九州平定の戦いで荒廃した福岡（博多地区）の復興事業

「軍師官兵衛」と記した横九郎、縦一丁の横断幕が登場。繁華街や商店街など街の至る所に「軍師官兵衛」と大書した幟（のぼり）が立ち並ぶ。幕藩時代の福岡市は、黒田藩あるいは福岡藩と呼ばれるが正式には筑前藩。初代藩主は黒田長政で、その父が官兵衛。官兵衛は豊臣秀吉の時代、秀吉による九州平定の戦いで荒廃した福岡（博多地区）の復興事業



予想を上回る聴講者が詰めかけた石瀧さんの講座＝4月18日

を連載している福岡地方史研究会会長の石瀧豊美さん。当初は会場を定員六十五人のセミナー室に予定したが、聴講希望者が多く、急きよ、定員百六人の円形ホールに変更する盛況ぶり。同連合会の古賀透調査役も「こんなに関心が高いとは思わなかった」と驚いたほどだった。

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 58 回

同時代から見た頭山満

②

―書と人物―

昨年、四月十五日、鹿児島、頭山満とじかに接した島の西郷南洲顕彰館で「西

南戦争と玄洋社の誕生―南頭山満の外孫に当たる筒井洲翁と玄洋社」というタイトルで話しました。その時、

会場に来られていた松浦彬さんから話しかけられたことが、私の頭山満研究に大きな示唆を与えるものでした。頭山満とは

頭山満とは何者か。これが私が四〇年近く考え続けていたことです。少なくとも戦後の頭山像は間違っています。間違っているだけではない、正反対に理解している。これが裁判ならば無罪の人物を有罪にして

いるようなものです。私が玄洋社研究に着手した当時、進藤一馬さんを初

め、頭山満とじかに接した方々は多くご存命でした。頭山満の外孫に当たる筒井楠雄さんのお姿も思い出されず。その時点で私の理解が浅く、かんじんのことを知らないまま時日を過ごし、貴重な証言を得る機会を失いました。頭山満とは

どういう人物かを知るには、戦後の研究は当てにならない。そこで、偏見なく頭山に接した人たちの証言をできるだけ集めることにしました。松浦さんが私に

もたらしたものが、私の思いに答えてくれることになりました。

松浦さんの恩師にあたる奥田栄穂さんが、昭和十四

年に頭山邸（渋谷区常盤松）を訪ねたところ、あいにく御殿場の別荘で療養中

でした。そこで奥田さんは翌日、御殿場に向かいます。そもそも鹿児島から上京した目的が「数年来敬慕し念願していた頭山満翁にお会いするため」だったのです。「この時の私の服装は、上下共にカーキ色の国民服に下駄履き、無帽、蓬髪、不精のアゴヒゲを生やした田舎青年の姿。片手にトランクを下げていたろうか。紹介状なしでも、た

だ真実一路の体当たり覚悟であった。」とも書いています。

奥田さんは鹿児島県の小学校の教師でした。紹介状も持たず、ふらりと訪れた無名の青年に気楽に会うのが頭山満です。部屋に通された時のことはこう書かれています。

「玄関の間の横の廊下を過ぎた次の間に通される。居間兼客間であろうか。十二畳位の広さであった。左側の縁側の先は中庭、その向うの夏空の下にくっきりと雄大な富士山の麗姿が浮かんでいるのには

度胆を抜かれる思いがした。座しながら富士山をこんな近くに眺めたことは初めてであった。主人公の頭山翁は床の間を背に袴姿で端然と坐しておられる。みごとな白髯をたらしめたお顔は写真で想像していたとおりであった。数え八十五歳のご高齢ながら、その悠然毅然そして脱俗の容姿は窓外の富士山の麗姿と併せ見るとき、正に『英雄頭を回らせば即ちこれ神仙』の感を抱かせられるものがあつた。」

頭山満はその五年後、昭和十九年に亡くなります。奥田さんはさらにその五十年後、平成六年にこの回想録を残しました。それを松浦さんがワープロに打ち直したのです。奥田さんが頭山満との会見のようを書き記した理由もわかります。

「頭山翁に親しく接した人は、その近親者や近辺の方々は別として、日本全国にも今や数少なくなりつつある。私がお会いしてからちょうど五十五年、その没後正に五十年という節目の年に当たり、どうしてもこの『訪問記』を書き残しておかねばという意欲が、今夏になって湧然と湧いて

きたのである。六十有余年の景慕の念は到底筆紙に尽くし得ざるものあり、駄文拙文まことに忸怩たる思いであるが、意のあるところをご推説いただきたい。」

奥田さんは自分の記憶の中の頭山満を、「どうしてもし書き残しておかねば」という思いにかられて、文字として定着したのでした。「平成六年八月三十一日 稿了」とあります。奥田さんと接している内に、この一年間、一字も書くことのなかった頭山が自ら揮毫をしようと言いつつ、目の前で書かれた書は軸装して奥田家に伝わっています。

「天下紛々亂如麻 鍊磨肝膽獨成仁」（天下紛々、乱れて麻の如し。肝胆を鍊磨して、独り仁を成す。）これは西郷隆盛の詩の半分だと、頭山は奥田青年に説明します。ところが奥田さんが見ると、二字足りませんでした。そこで後で書き加えたのが右下にはみ出している「肝膽」の二字です。頭山はその詩をそららじえて吟じます。そして次のように語りかけます。「『わたしの書もこの頃は少しは値がするらしく、大

分偽物が出回っているそうじゃ。この悪筆を真似するのもしや骨が折れることじゃろう。だがあんたのこれはまちがって書いてあるから、まさかまちがいを真似する奴はあるまいから、かえって本物と判ってええ。」正に達人の

達言、天衣無縫の神人の真言を聞く思いがした。」

頭山満の面目躍如。奥田元までグシャッとつぶされたのは驚いた。ドボツとつけた小筆の先から、第一字を書かれる前にポタリと墨滴が紙面に落ちた。ヤレヤレと顔をしかめた私、恐らく女中さんもそうだったろうが、ご本人は全く平気の平左。第一字から半分あたりまでさらさらと一気に書き下ろされた。」

「如」の字が現れ、筆跡はそっくりです。「いよいよ揮毫の始まりだ。硯箱の中には小筆が一本しかない。その小筆を執って穂先の中程をちよつと歯で噛んで水に浸される。すぐ袴の膝頭を少し開いて半折紙の上に跨いで

左手で体を支えて、右手の小筆を墨につけて穂先の根元までグシャッとつぶされたのは驚いた。ドボツとつけた小筆の先から、第一字を書かれる前にポタリと墨滴が紙面に落ちた。ヤレヤレと顔をしかめた私、恐らく女中さんもそうだったろうが、ご本人は全く平気の平左。第一字から半分あたりまでさらさらと一気に書き下ろされた。」

掛軸は八十五歳の時の作品とわかっています。高年齢で、病氣療養中でもあり年のように充実していたの

でした。

※資料をご提供いただいた、奥田満子様、松浦彬様、村井宏彰様のご芳情に感謝

します。

「頭山満と自署した掛け軸と、立雲と自署した扁額。どちらも本物に間違いありません。偶然どちらにも

分偽物が出回っているそうじゃ。この悪筆を真似するのもしや骨が折れることじゃろう。だがあんたのこれはまちがって書いてあるから、まさかまちがいを真似する奴はあるまいから、かえって本物と判ってええ。」正に達人の

達言、天衣無縫の神人の真言を聞く思いがした。」

頭山満の面目躍如。奥田元までグシャッとつぶされたのは驚いた。ドボツとつけた小筆の先から、第一字を書かれる前にポタリと墨滴が紙面に落ちた。ヤレヤレと顔をしかめた私、恐らく女中さんもそうだったろうが、ご本人は全く平気の平左。第一字から半分あたりまでさらさらと一気に書き下ろされた。」

掛軸は八十五歳の時の作品とわかっています。高年齢で、病氣療養中でもあり年のように充実していたの

でした。

※資料をご提供いただいた、奥田満子様、松浦彬様、村井宏彰様のご芳情に感謝

します。

